

制作者の視点(2)

四方道人

中学校、高等学校関係の教材として、今回は「教育実習の日々」中学・高校編の1本と「実習生の授業シリーズ」中学校・英語、高校・国語編2本の合計3本が完成した。この試作教材の内容の紹介と完成までの編集経過について、編集担当者としての意見もあわせて述べることにする。

「教育実習の日々」は実習期間中に実習生が体験する学校生活とその行動をできるだけ詳細に紹介しようというものである。ただ一人の実習生をドキュメント形式で一日中カメラで追うことは、教材制作の目的からも、また物理的にも無理な話である。このため大学での教育指導のポイントになるようなものをリストアップ、取材予定に従って録画していった。編集では教育実習期間中の流れが理解できるような項目をあげ、できるだけ多くの事項を入れるように心掛けたつもりである。

「教育実習の日々」の主な項目を上げてみると、生徒・実習生の登校風景、出勤簿の捺印と控室、全校集会での実習生の紹介、ホームルームでの自己紹介、指導教諭による実習の心得と注意、授業参観、教科指導案の事前指導、実習生の授業・研究授業、授業の反省と指導、教材の準備作業、授業の研究、実習日誌の記入、提出、生徒との交歓、実習の反省、指導教諭との交歓などである。

「実習生の授業シリーズ高校・国語編」は「最初の授業」「授業の反省と指導」「最後の授業」の3項目である。「最初の授業」では、教科書「偽善の勧め」について生徒が挙げた、スターの偽善と共同募金の例をとりあげて、教科書の読み方について、また最後の授業では、第三段落から板書にまとめ、漢字の正しい読み方、病を養うということ、悪人がミイラになるということの解釈、全体のまとめ、文体についての感想などである。「授業の反省」は、生徒に対する態度、授業の進め方、生徒の発言の取り上げ方、漢字の読み方、指導案の内容と作成についてなどである。ここでは教科担当指導教官から厳しい批評が加え

られ、その結果が実習生の最終授業に生かされているのが明瞭に読み取れる。実習生自身がこの期間に学んだことがどんなものなのかが映像の対比によってわかるのである。

教材作成では「どんな場面が必要であり、また必要でないのか」ということが何時も問題となる。教材の長さ（秒数）や目的などによっても影響される。また教える側と教えられる側にとっても必要な場面が違ってくると思う。こんな場面の教材や映像があれば指導に便利だ、教科別の授業の様子が見たいなど、十人十色の要望では制作・編集に困るので最大公約数が求められる。このため編集の基本方針としては、実習生が教育実習の期間中に体験する場面をできるだけ多く入れる、教育実習全体の流れがわかるように映像編集することを心掛けたつもりである。編集の途中で視聴してもらったモニターの意見のうち、代表的なものをあげると(1)ホームルームの場面がほしい、(2)実習生と生徒との交流、付き合いの場面がほしい、(3)教材研究・研究授業の場面がほしい、(4)課外活動の場面がほしいなどである。このなかで(1)のホームルームと(2)の生徒との交流の場面は、教材として映像に記録することが難しいものの一つである。ホームルームの運営については形式がないため映像で例示することが非常に困難である。

生徒との交流場面は、何度か実際に目撃はした。しかし偶発的な行為であるため、そのチャンスを生かして録画することは非常に難しいことである。ただ一回だけ英語科の実習生の教材準備を録画中に、家庭科の料理の時間に女生徒が実習生を呼びにきて、試食に招待して交歓するというシーンの録画がある。この時も突然のことでスタッフ一同は機材を担いで階段をかけおり大至急セッティングを完了し、訳のわからないうちに収録を終わったことがある。このようにほとんどが次の授業の録画のために、急いで撮影機材を撤収中だったり、スタッフが移動中かカメラの準備中に目撃された。なんとも残念なことながらどうすることもできなかった。予定されているメインの取材が優先するため、今後は必要ならば意図的に狙って録画するしか方法はないだろう。

ホームルーム、特別活動も要望の多いものだが、教育実習中の実習生はノー

タッチというところが多い。2週間から3週間の期間で1回位の授業では、どのように扱っていいのか判らないというのが本当で、無理なのかもしれない。実際は担任教師の指導方法を見学するか、生徒たちの活動に立ち合うだけのところがほとんどである。道德教育についても同様である。

教材の中で登校風景や出勤簿の捺印、自己紹介などの場面はいらないとの意見があった。一方では教師として社会人の第一歩は出勤簿の捺印と挨拶に始まるといわれる。学生生活では印鑑、朝夕の挨拶、それに言葉遣いは余り重要視されないものばかりで、社会人になって初めて必要となるものである。ということを入れてみたがどうだろうか。登校風景は教材のイントロ部分、表紙代りでタイトルバックの必要性のために付けた。また学校の環境、生徒や実習生の素顔や態度もわかるので、これも教材になると思ったからである。

教材が完成するまでには、何回となく試写と編集が繰り返される。最初の段階では「教育実習の全体の流れ」を紹介するため、代表的と思われる多くのシーンを入れた。このため1本が50分から60分にもなった。それでもいい場면을数多くカットしたのである。試写と討論の度毎に少しずつカットされ、最終的には40分位にまとめたのである。

高校編はどうしても授業中心の映像となる。実習生と高校生の交歓風景などは見たくても見れないのが現状である。担当教科ごとの授業、教案の作成、教材準備などのほかに、どんな映像が必要なのかを再検討する必要があるのではなかろうか。

実習生の授業は1時間まるまる収録してある。しかし30分でも教材としては時間が長過ぎるというのでは、このままでは使えないと思う。教材資料がある程度集まった時点で、板書編、発問編、机間巡視編など目的別、用途別に再編集して利用することになるだろう。

最後に多くの人たちからご意見や注文が寄せられたが、教師教育教材として全てを映像教材に依存するのはどうであろうか。映像教材としてむいているもの、印刷教材で十分なもの、または講義で説明できるものなどの区別が必要である。その上で言葉で説明するより映像の方が理解しやすいものについては、

どんな方法がより教材として活用できるかを研究していかなければならないであろう。例えば教室の映像一つをとっても教師の動きの全てを観察したい人、生徒の反応や授業時間中の態度を見たい人、両方の動きを全て観察したい人もいるだろう。これらの要望は映像を記録する上では、なんら困難な問題はないし、現在の編集テクニックでは簡単にできることである。ただし撮影条件、費用、目的などが許されたときだけである。それに研究利用者と映像施設の整備状況なども考えなければならない。今のところは、希望されるであろう最大公約数を求めて映像の収録と編集を行っている。

近年OA機器の開発と進歩はめざましいものがある。テレビ画面の大型化、撮影機器の小型軽量化、それにデジタル信号化も近いだろう。書き込み消去自由のレーザーディスク、高品位テレビなどの出現で教室での講義や研究方法も変わることだろう。また実用化される日も近いと思う。担当教官や学生たちがCDに収められた教材から、必要な映像をランダムアクセスで呼びだし、自由自在に順序を入れ替えて編集して見ていることだろう。その頃には壁掛け式の大型高品位テレビも実用となっていよう。教室の壁一杯のスクリーンに写しだされた生徒に向かって、教育実習の授業研究が行なわれていることだろう。コンピュータで制御された教材資料とともに、実習生の授業が記録され評価が即時に出てくることになる。そのときは教材の編集方法も改めて考え直さなくてはならない。制作担当者としても、よりよい教育教材を求めて今後とも研究を続けて行きたいと思っている。